知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 ［ココナッツクラブ］

COCONUTS CLUB

AUGUST 2019 8

野間大坊、いまむかし

野間大坊、いまむかし

元号をまたいでお送りしてきた知多半島の観光探究シリーズ、
その締めくくりは野間大坊だ。
誰もが知っている半島随一の名所、
その歴史と見どころを余すところなく紹介しよう。

鶴林山大御堂寺、その始まり

前号でじっくり紹介した観光地野間において、最大の名所が野間大坊である。半島に古刹は数あれども、もっとも知名度が高いのは野間大坊であることに異論はなかろう。野間の目玉と言うより「知多半島の目玉」というべきメジャーな存在であるここには、知多四国霊場の巡拝者だけでなく観光客も多く訪れ、一年を通じて賑わっているイメージがある。

初詣スポットとしても知られているし、おそらく読者の多くが一度は参拝したことがあると思うが、今回改めてひとめぐりしてみよう。

広い境内のどこから見ればいいのか一瞬戸惑うが、まずは正式な入口ともいうべき大門から始めたい。南東端の方に建つ大門は、六本の柱の上に屋根を乗せた比較的簡素な構造。実はこれが境内で一番古い建造物で、鎌倉時代直前の建久元年（一一九〇）に建てられたものだ。

大門をくぐると、真正面に大御堂寺の本堂がどっしりと構えている。建造されたのは宝暦四年（一七五四）だが、鎌倉時代の様式に則っている。いにしえの姿を伝えるこの風格ある本堂が一山の中心である。

実は「野間大坊」というのは通称で、正式には境内全域が「鶴林山大御堂寺」という…などと書くと、初めて訪れた人は困惑するかもしれない。野間大坊ではなく大御堂寺？野間大坊の中に大御堂寺があるのか、それとも大御堂寺の中に野間大坊があるのか？知多四国霊場の札所番号は、大御堂寺は第五十番、野間大坊は第五十一番と別の寺として扱われているが…。

これはどういうことか、説明しておこう。かつての大御堂寺は「一山十四坊」と言われるほどの規模を誇り、今よりも広い境内に僧が居住する「坊」が十四もあった。「大坊」はそのうちのひとつで、寺務を統括する中核施設だった。明治の初期には大御堂寺が無住になっていたため、いつしか大坊の存在感が大きくなり、「野間にある大坊」の意味で「野間の大坊」や「野間大坊」という名が通るようになったようだ。

では、大御堂寺はどのようにして創建されたのだろうか。

寺伝によると、その大御堂寺の起源は今を遡ることおよそ千三百三十年前。天武天皇の時代（六七三～六八六）、優婆塞（修験道の開祖「役行者」とも）がこの地に寺を開いたのが始まりという。その数十年後の聖武天皇の時代（七二四～七四九）、そこに奈良時

大御堂寺本堂
知多四国50番札所。大同年間（806-810）に弘法大師が逗留し護摩修法を行った。本尊は平安時代中・後期に造立されたと言われる阿弥陀三尊。

接待所
巡拝者に湯茶をふるまった休憩所。現在は「おやすみ処 まどか」。

鎌田政清の墓
源義朝の重臣。長田父子に謀殺された。

圓明院
明治8年（1875）安養院に合併。知多四国の旧55番札所。

源義朝公御廟

池禅尼の墓
源頼朝が平清盛に捕らえられたとき助命を嘆願した。これに感謝した頼朝により建立。

織田信孝の墓
織田信長の三男。豊臣秀吉や兄の織田信雄と対立して敗れ、送られた安養院で自害した。

弁財天尊

大マニ車

乱 橋
源義朝家臣の渋谷金王丸が敵と戦った。

法山寺
知多四国55番札所。本尊は御湯殿薬師如来。

手水舎

御湯殿跡
源義朝が入浴中、長田父子の刺客に討たれた。

出世稲荷

長田屋敷跡
絵図と案内板の場所が異なる。

悠紀殿

はりつけ松
処刑された長田父子が磔にされた場所。

野間大坊客殿
知多四国51番札所。頼朝が寄進した定朝作の地蔵菩薩が本尊。

鐘楼堂
鎌倉幕府5代将軍源頼嗣が寄進した梵鐘（国重文）がある。

平康頼の供養塔
文治2年（1186）、義朝の墓が荒れているのを見て水田を寄進した平安時代の末期の武士。源氏の子孫が供養のために建立したもの。

龍松院
明治8年（1875）安養院に合併。知多四国の旧54番札所。

神明神社
大御堂寺の守護神で明治時代に現在の渡辺病院の南に遷座。今は野間保育所・柿並集会所が建つ。

慈雲院
明治8年（1875）安養院に合併。知多四国の旧56番札所。

安養院
知多四国53番札所。大御堂寺の南ノ坊として創建。織田信孝が自害した部屋や刀などが残る。

大 門

密蔵院
知多四国52番札所。大御堂寺の宝乗坊として創建。

血の池
長田父子が義朝の首を洗ったことからこの名が付いた。この事件以後、世の中に変事がある時は水が赤く染まると伝わる。

「尾張国名所図会 巻六」（天保15年〈1844〉）刊）より。図版提供:愛知県図書館

代に活躍した高僧・行基が阿弥陀三尊（阿弥陀如来、観音菩薩、勢至菩薩）を安置し、「阿弥陀寺」となる。

少し間を置いて平安時代半ばすぎの承暦年間（一〇七七～八一）になると、白河天皇の勅願寺として再興され、寺号も大御堂寺と改められた。勅願寺というのは、天皇や上皇の発願により、国家安泰や皇室繁栄を祈願するために創建される寺のこと。有名なところでは奈良の東大寺（聖武天皇）や薬師寺（天武天皇）、京都の仁和寺（宇多天皇）や醍醐寺（醍醐天皇）などがある。つまり、古くから格式の高い寺だったわけだ。

また、寺伝とは別に次のような説もある。

平安時代後期、大御堂寺は京都伏見にある安楽寿院という寺の支院だった。安楽寿院は保延三年（一一三七）、鳥羽上皇が鳥羽離宮東殿に築いた仏堂が起源で、ここに上皇の寿陵（生前に築造する墓）である「本御塔」と、皇后の寿陵である「新御塔」という二つの三重塔が建立された。安楽寿院には全国の荘園が寄進され、その中のひとつに知多半島の荘園「野間内海荘」もあった。野間内海荘は安楽寿院のうち本御塔の領に属しており、この「本御塔」が転じて「大御堂」になったともいう。

いずれにしても、歴史的に皇室と深い関わりのある寺なのである。

義朝の最期、長田父子の最期

大御堂寺本堂の右手には、石垣に囲まれた空間がある。その一角に設えられた小さな門をくぐって石垣の中に入ると、目に飛び込んでくるのは、石塔を埋め尽くす夥しい数の木太刀だ。この場所こそ、野間大坊を半島随一の名所たらしめている最重要史跡、源義朝公御廟である。

平安時代末期の平治二年（一一六〇）、源義朝が家臣の謀反により野間の地で殺されここに葬られた話は、近年では平成二十四年（二〇一二）に放映されたNHK大河ドラマ「平清盛」でも描かれたので、ご記憶の読者も多いと思う。今一度その物語をおさらいしよう。

事の始まりは京で起きた「平治の乱」だった。これは、後白河天皇政権内部の覇権争いから起きた内乱である。紙幅がないのでかいつまんで説明すると、源義朝らのグループは政権中枢を急襲・排除して一度優位に立つが、すぐにまた内部対立が起こり、平清盛を中心とする一派と武力衝突が勃発。これに敗れて本拠地の東国へ逃げてゆく…という流れ。野間での一幕は、敗走途上で起きた事件だ。

時代は平安から鎌倉へ。
手に汗握る歴史ドラマ！

＊　＊　＊

京を脱出して東へ東へと向かう義朝一行は、途中の伊吹山中で三男頼朝とはぐれたり次男朝長が死ぬなど、ほうほうの体で美濃の青墓（現岐阜県大垣市）まで辿り着いた。ここからは川を下って伊勢湾に出て、海路、野間へと向かう。野間には代々の家臣である長田忠致がおり、彼を頼ろうというのだ。

内海の北の外れに上陸した一行は、山を越えて野間の長田屋敷へと急ぐ。その途上、山あいの内扇という村では、空腹のあまり農家に立ち寄って食事を乞うた。折しも年の瀬の頃、その家ではちょうど餅をついていたところだったので、とりあえず、おこわ状だったつきかけの餅を蒸籠のまま差し上げると、一行はたいそう喜んでそれを平らげた。

さて、ようやく野間に辿り着いた義朝の一行は、待ち構えていた長田忠致の歓待を受ける。ようやく一息つく義朝。しかしその裏で、謀が進行していた。

忠致はこう考えていた。「世の趨勢は今や清盛率いる平家にある。このまま主君の義朝を東国へ逃したところで、どこかで討たれるかもしれない。ならばいっそこの手で討って清盛公に差し出せば、恩賞を得られるのではないか」。忠致は息子の景致と密かに相談し、謀殺を実行に移す。

まず、義朝重臣の鎌田政清を屋敷に呼んで酒を振る舞い、飲みすぎたところを見計らって景致が斬り捨てた。

次いで翌朝、義朝が御湯殿薬師（法山寺）へ参詣したのに同道した忠致は、ここで湯に入るよう勧める。湯殿の外では義朝家臣の渋谷金王丸が控えていたが、主君の着替えがないことに気が付き、長田邸へ取りに行った。その隙をついて、忠致配下の者が三人がかりで義朝を組み伏せ、その首を掻き切った。このとき義朝は反撃できなかった無念さのあまり「せめて木太刀の一本でもあれば」と呟いて息絶えたという。大御堂寺の義朝廟に木太刀が奉納されているのは、この末期の台詞に由来する。

一方、長田邸から義朝の衣服を持って戻ってきた金王丸は、湯殿から出てきた三人を見て「これは何か只ならぬ事が起きた」と直感し、即座に斬り捨てる。湯殿には義朝の遺体があるが首はない。長田の謀略と悟った金王丸は、途中の乱橋で待ち構えていた敵をものともせずなぎ倒し、再び長田邸へ。しかし長田父子の姿は見当たらない。「さては主君の首を携えて清盛のいる京へ向かったか」と、自ら厩に繋がれていた馬に跨り駆け出した。

その長田父子はというと、池で洗った義朝の首を携えて京へと向かっていた。上洛し、恩賞を期待して清盛にこれを差し出す。ところが、義朝が亡き者になったことは喜ばれたものの「自分の主君を討つとはあまりに不義」と不興を買い、恩賞も与えられなかった。この話は都にたちまち広がり、長田父子は身の置き所をなくしてしまう。

そうするうちに平家の権勢は衰え、義朝の子・頼朝が日の出の勢いで台頭してきた。観念した長田父子は頼朝の前に姿を現し、厳罰を願い出る。しかし頼朝は「軍功を挙げれば美濃尾張を与える」と、逆に長田父子を鼓舞した。これに喜んだ父子は各地の合戦で活躍する。

やがて頼朝は覇権を握り、建久元年（一一九〇）、父の菩提を弔うため大御堂寺に参拝した。本堂や鐘楼、大門など七堂伽藍を整備し、高野山の僧侶を招いて大法会を行った。

頼朝の軍門に下っていた長田父子は、この時、頼朝の命により突如捕縛された。頼朝は父の仇を忘れていなかったのである。二人は板に磔にされ、義朝廟の前で処刑された。

野間大坊はテーマパークである

では、大御堂寺本堂から境内を西へと進もう。緑に包まれた境内路沿いには、赤い鳥居が並ぶ「出世稲荷」、二層になった大きな鐘楼、御殿のような「悠紀殿」などがある。悠紀殿は、昭和天皇の即位礼のときに京都御所に建てられた建物の一部で、下賜されてここに移築された。これも皇室との繋がりを示すものだ。

そして、その向こうに見えるのが「大坊」の客殿だ。こちらは豊臣秀吉の居城だった伏見桃山城の一部で、江戸時代初期の寛永年間（一六二四～四四）に移築されたもの。大御堂寺は戦国時代に二度も戦火に遭い、鎌倉時代に比べると衰えていたが、それでも秀吉や徳川家康の庇護を受けて（秀吉も家康も参拝したと伝わる）、大寺院の風格を留めた。前頁の絵図は、まだ七坊を有していた江戸時代後期の風景である。

危機が訪れたのは明治維新の後である。明治政府は、江戸時代には認められていた神社・寺院の領地を没収する施策を打ち出し、これにより大御堂寺の広大な領地も三分の二にまで減ってしまったのだ。神道による国家統合が目指されたこの時代は、寺にとってはまさに逆風の時代。土地や特権を失っただけでなく、境内の坊が合併・独立して規模が縮小。行く末を憂えた僧侶の多くは寺を離れて帰俗し、堂宇はことごとく壊れ果ててしまう。

なんとも惨憺たる有様だったが、当時の住職の水野生圓は、数十年をかけて大御堂寺の復興に取り組んだ。今、

美しい境内風景を見ることができるのは、基盤を整えた生圓師の尽力によるところが大きい。やがて知多四国霊場の巡拝が盛んになり、知多半島南部が観光地としてクローズアップされるようになると、野間大坊も再び輝きを取り戻した。

そうした歩みを踏まえてか、歴代住職はいろいろな仕掛けを施し、参拝客に楽しみを与えてきた。点在する史跡や歴史的建造物群には案内板を設置してあるし、ほかにも、四国八十八ヶ所の札所寺院の砂を埋めた「お砂踏み」（踏みながら礼拝すれば現地に行かなくても同じ功徳が得られるもの）や、本誌２０１８年12月号「ビッグサイズものがたり」で取り上げたマニ車など、興味深いものがいくつも見つかるのだ。

アトラクションの際たるものが、大坊の客殿で行われる「源義朝公最期の絵解」である。これは、前段で紹介した義朝謀殺から長田父子磔刑までの一幕を、大きな掛け軸の絵を用いて住職が説明するというもの。使われるのは江戸時代初期に活躍した幕府御用絵師の狩野探幽が、尾張藩初代藩主徳川義直の命により描いた絵の原寸大レプリカで、本物は国の重要文化財に指定されている。僧侶らしいリズム感と低音ボイスで心地よい語りを聞かせてくれる現住職の水野真円さんによると、歴代の住職が絵解きをしてきたとのこと。

近年に至っても楽しみは増えている。平成二十六年（二〇一四）には、住職夫人による手打ち蕎麦と甘味の店「おやすみ処まどか」がオープン、平成二十八年（二〇一六）にはマルシェイベント「大坊の楽市」がスタートした。「まどか」が建つのはかつて接待所（お茶所）があった場所である。接待所とは、知多四国の巡拝者に無料で茶や総菜などを提供した休憩所のこと。この店には、巡拝者を受け入れ労ってきた知多半島伝統の「おせったい」の精神が今もなお生きていることを感じさせる。また、地元を中心とした飲食店・農家・加工業者・クリエイターなど多くの店が並ぶ大坊の楽市は、寺が地域のコミュニティの中心として機能していた時代を彷彿させる。

このような現代的な取り組みにも伝統が背景にあることを感じさせる点は、長い歴史を持つ野間大坊だからこそ。野間大坊が親しまれ続けている理由は「歴史と仏教のテーマパーク」的な雰囲気を持っていることにあるのだろう。

源義朝公最期の絵解／電話（0569-87-0050）かHP（http://nomadaibou.jp/）で事前予約。住職在坊の場合は当日申し込みも可。所要時間約20分、有料

お休み処 まどか／10:00〜15:30、不定休（12月第2週〜1月第1週は休業）

知多半島を旅するならば、
野間大坊は絶対に外せない。

参考文献◎源平史蹟尾州大坊大御堂寺沿革略記（水野隆圓編）／野間町史（野間町発行・美浜ふるさと研究会復刻）／美浜町誌 本文編／保存版 知多巡礼紀行（知多四国霊場会監修・樹林舎）歴史REAL Vol.5 革命児・平清盛（洋泉舎MOOK）　取材協力◎鶴林山大御堂寺野間大坊